

## 論文

## 簿記教育における 2 コマ連続授業の教育効果

Educational Effects of Two Consecutive Classes  
in Bookkeeping Education

島 田 信 子

SHIMADA Nobuko

## 抄録

本稿は、一人の講師が異なる大学で同一教材を用いて同時期に行った授業のケーススタディである。初学者を対象とする簿記の授業（1 コマ 90 分×15 回）を 2 コマ連続×7.5 週で実施している A 大学と、従来通りの 1 コマ×15 週で実施している B 大学の期末テスト結果を  $t$  検定（等分散を仮定した 2 標本による検定）により分析し、両群間の母集団による平均値には有意な差が認められることを明らかにした。また、両群を 2 つの集団としたときの平均値の差をみるための効果量の計算においても 1.057 という非常に大きい値を示しており、両群の平均の差は大きいとの結論を導き出している。

簿記の場合は体育の授業と同様に、授業内でルールを理解し、体現し、再現できるのかというところまで到達してこそ、有効な自宅学修が可能になる。2 コマ連続授業を実施している A 大学では、学生は自力で問題を解けるレベルに到達すれば、授業の間の休憩時間も学修を続ける行動をとることが確認された。

キーワード：簿記教育 学修効果 集中講義 連続授業 自宅学修時間

## 1. はじめに

AIをはじめとする科学技術の急速な進化やグローバル化の進展の中で、今後の予測困難な時代を生きていくためには、学び続けていくことが必要である。従って、学生には今まで以上に主体的に学修に取り組むことが求められる(文部科学省 2020)<sup>1</sup>。

学生の主体的な学習を可能にするためには、同時に履修する授業科目を絞り込むとともにアカデミックカレンダー(学事暦)を柔軟に運用することで、授業科目を従来の週1コマから複数回実施への変更を検討しなければならない(文部科学省 2020)<sup>2</sup>。同時に履修する授業科目が多すぎると、学生が単位の取りやすさのみで履修科目を選択しがちになることや、1科目に充てられる学修時間の減少が懸念されるからである。既に、大学によっては同一科目を週に複数回開講するところや、授業時間を2コマ連続にするところなども出始めている<sup>3</sup>。このように、大学側がカリキュラム編成に工夫を凝らすことで学生の学修行動に一定の効果を示すことは可能であるのだろうか。

本稿は、簿記の初学者対象の授業を2コマ連続で実施している大学と、従来からの週1コマで実施している大学とを比較し、それぞれの期末テストの成績を分析する。その結果、総コマ数、担当講師、使用教材、授業進度、のすべてが同一であっても、両群間の成績には有意な差が認められ、2コマ連続授業の実施で学修効果が向上する<sup>4</sup>ことが明らかになった。また、連続授業の場合に学生は休憩時間をどのように過ごしているのか、その特徴的な点についても言及する。

## 2. 先行研究

簿記教育にかんする先行研究には、学生アンケートを用いて学生の集中度と理解度の相関を分析した田邊・水代(2019)や、同じく学生アンケートをもとに成績と自宅学修時間の相関や、成績とやる気についての相関を分析した手嶋・金川(2019)などがある。前者は、教育現場での学生間のモチベーションの差がクラスの雰囲気にも悪影響を及ぼすことや、学籍番号順によるクラス編成やマスプロ教育の弊害等について指摘している。また、能力別にクラスを分けて指導した結果、下位クラスの学生は欠席しがちになり失格となる学生が増える傾向についても言

及している。後者は、授業中に集中力が切れる原因として「内容が難しいと感じたとき」「周りがうるさいとき」「疲れたとき」の3点を挙げ、成績と自宅学修時間には相関があり、成績とやる気の間にはさらに強い相関があることを指摘している。その他、習熟度別クラス編成の教育効果について分析している庄司他(2020)では、習熟度別クラス編成が学生に不公平感を生み出すことや、結果として上位クラスの成績向上には効果があるとは言えなかったことを主張している。

授業を連続コマにすることについての先行研究では、原田(2021)の「高等学校における連続した体育の授業の考察」がある。この研究の対象校は1コマ55分の高等学校で、1年生は3コマ連続、2～3年生は2コマ連続で体育の授業を行っている。原田(2021)によると、連続授業のメリットとしては準備や片付けの時間が削減されること、個人的にアドバイスするための時間が持てること等が挙げられている。また、デメリットとしては連続コマにすると授業自体が週1回になり運動習慣が定着しにくいこと、種目によっては連続授業に向かないものがあることなどが述べられており、長距離走など運動強度が高いものは連続授業として実施するのは難しいことを指摘している。

簿記は、日々の経営活動を記録・計算・整理する技能であるから<sup>5</sup>、その習得には手先を動かすことが重要である。これは、体育の授業では実際に身体を動かすことと類似している。簿記と体育は連続授業にすることで準備や片付け、すなわち前回までの振り返りや今日のおさらいに要する時間が削減できる点や、週1回程度の授業頻度では学修習慣が定着しにくい点も共通するであろう。以上のことから、簿記の授業においても2コマ連続ないし短期集中講義のスタイルでまとめた時間を授業に充てることができれば、従来の週1コマ実施の授業に比較して学修効果が高まるのではないだろうか。

### 3. 調査内容および分析方法

初学者を対象とする簿記の授業(1コマ90分×15回)について、2コマ連続×7.5週で実施しているA大学と1コマ×15週で実施しているB大学における履修学生の期末テスト結果を分析する。両大学はともに関西にある総合大学で、筆者が2023年度前期に非常勤講師として両クラスを担当した。いずれも初学者対象

の1年次配当であり、再履修の学生は含まれない。両大学ともに授業時間は1コマ90分、授業間の休憩時間は15分である。

図表 3-1 授業時間の構成

### A大学

W-1

(90分授業)	(15分休憩)	(90分授業)
---------	---------	---------

W-2

(75分授業)	(15分休憩)	(90分授業)	(予備)
電卓演習①	【検定用】ミニテスト	解答&解説	
		電卓演習②	【講義①】 + 【講義②】

### B大学

S-1

(90分授業)		
電卓演習①	【講義①】	ミニテスト

出所) 筆者作成

上記の(図表 3-1)は、授業時間の構成を示している。A大学は90分授業を2コマ連続、授業間の休憩時間は15分であり、それを図示したものがW-1である。W-2は、実際にどのような構成で授業を行っていたのかを示している。2コマとも授業冒頭の15分は電卓演習として1コマ目は主にタッチタイピング練習、2コマ目は実務電卓の機能を使いこなすための練習に充てる。引き続き、検定用ミニテストでは全国経理教育協会の全経4級<sup>6</sup>の過去問題を参考にして、毎回異なる問題にチャレンジさせ、早い段階から簿記の入門レベルについての全体像を把握させるようにした。問題を解く時間としては60分を充てているが、その間は解き方のヒントを板書するなどして各自がその時点での能力に応じてヒントを見るのか自力で解くのかを選べるように配慮している。終了後は解答を配付せずに板書のみ行い、各問題の解き方は書画カメラを用いて実演するスタイルである。

連続授業では、2コマ目になってからテキストに沿った授業を行う。1コマ分の時間で2コマ分の量を扱うことになるが、毎回その日に扱う単元が1コマ目に実施したミニテストにも出題されているので既知の状態を進めることができる。それらは直前まで手を動かして学修した内容であるから、少なくともその場での定着度は高いことが期待される。テキストの内容に加えて、その日に扱う単元が検定試験ではどのように出題されているのかも関連付けて習得することができる。一方で講師側は2コマ分の内容をまとめて扱うことで、説明に要する時間は大幅に短縮することができる。

B大学の場合は週1コマ授業であり、90分の授業時間構成を図示したものが(図表3-1)のS-1である。A大学と同じく冒頭の電卓演習に15分を充て、講義としては正味60分としている。A大学よりも長い講義時間が必要なのは、前週までに学修したことの振り返りに時間を要すること、学生たちが次週の予習を進めやすくするために次週の内容についても予告しておく必要があることが主な理由である。60分を充てていても足りずにミニテストが実施できない日もあり、ミニテストの15分間は実質的には予備時間であった。授業終了後に質問してくる学生もあり、最低でも5分程度の予備は必要になる。

両大学の受講者数(n)と、期末テスト結果についての平均点(Ave.)と標準偏差(SD)を求めたものが以下の(図表3-2)である。

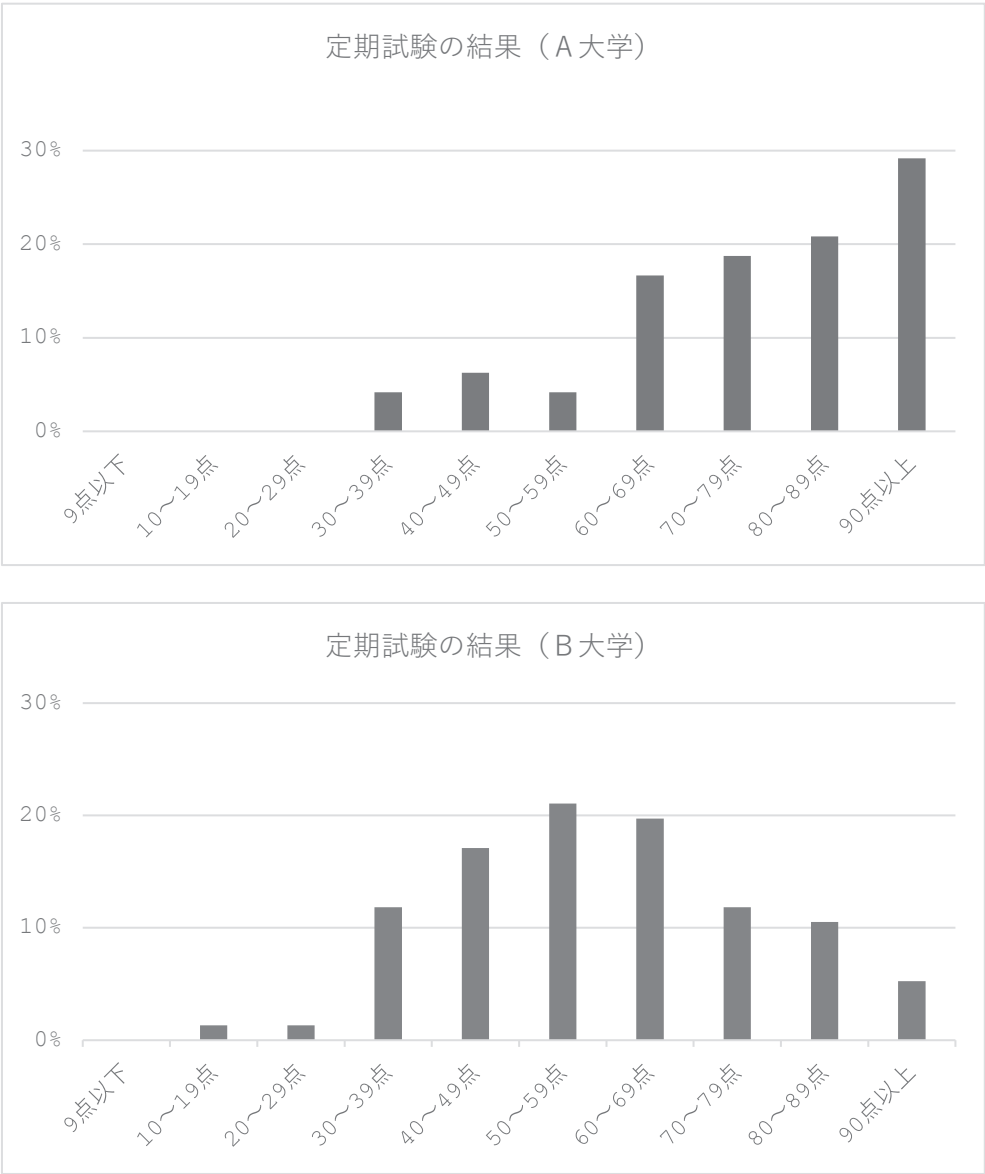
図表 3-2 両大学の平均点と標準偏差

	A 大学 (n=48)	B 大学 (n=76)
平均点 (Ave.)	77.2	58.7
標準偏差 (SD)	17.5	17.5

平均点についてはA大学が77.2点、B大学は58.7点であった。標準偏差は両大学ともに17.5であるから、平均点 $\pm 17.5$ の範囲(A大学では60点~95点の間、B大学では41点~76点の間)に約67%の学生が含まれることを意味する。

次に、A大学とB大学の期末テスト結果からヒストグラムを作成したものが(図表 3-3)である。受講者数に差があるため、ヒストグラムの縦軸は相対度数(%)にしている。

図表 3-3 両大学の期末テスト結果 (ヒストグラム)



出所) 筆者作成

両大学のヒストグラム（図表 3-3）について、これらが正規分布からどれだけ逸脱しているかを表す歪度と、これらが正規分布に比べてバラツキの大小がどれほどあるかを表す尖度を計算すると、次のようになる（図表 3-4）。

図表 3-4 両大学のヒストグラム「歪度」と「尖度」

	A 大学	B 大学
歪度 (SKEW)	-0.68	0.01
尖度 (KURT)	-0.26	-0.52

A大学のヒストグラム（図表 3-3）は山の形が右に寄っているように見え、B大学では山の形はほぼ左右対称に見える。それを数値で示したものが（図表 3-4）の歪度である。歪度はヒストグラムの形が右に寄るとマイナスの値になり、左右対称のときゼロになる。A大学の場合は $-0.68$ であるから明らかに右に寄っていることが数値にも表れており、B大学の歪度は $0.01$ であるからほぼ左右対称であるとみなすことができる。目安として歪度の絶対値が $0.5$ を超えなければ正規分布とみなすことができるが<sup>7</sup>、A大学の場合はそれを超えている。

今回実施した期末テストは、70 点前後を到達目標として作問している。言い換えれば、7 割を基本的な問題で構成し、残りの 3 割は応用レベルとしている。A大学では 48 人中 33 人が 70 点をクリアしており、全体の 7 割近くの学生が到達目標に届いていることになる。この結果がヒストグラムの形を大きく右に寄らせており、歪度が大きくマイナスの値を示している理由である。これに対してB大学の場合は 70 点に達している者は 3 割にも満たないが、学生間の到達レベルの差を測る目的としてはほぼ正規分布に近いヒストグラムになっていることから、期末テストの難易度は適切であり成績判定がし易い結果となった。

一方、尖度については、正規分布とバラツキが等しいときに値がゼロになる。ヒストグラムの形が平たくなるほどマイナスの値が大きくなり、データ間のバラツキが大きいことを表す。両大学ともにマイナスの値を示しており、なだらかな山である。これは、期末テストの配点にも左右される。つまり、10 点×10 問の場

合と 1 点×100 問では前者のほうがなだらかな山になりやすい。今回実施した期末テストは 1 問だけ 10 点のものがあり、残りは 1 問につき 2 点～4 点で作問している。

これらのデータを用いて、2 コマ連続で授業を行っている A 大学と 1 コマ×15 週の B 大学の、差の検定を行った。両群間のデータを分析し「同じコマ数でも、2 コマ連続にするほうが学修効果は向上する」という仮説を検証する。学修効果とは、ここでは「期末テストの点数が高いこと」と定義する。まず、両群の分散に違いがあるかをみるための  $F$  検定を行い、その結果を受けて、等分散を仮定した 2 標本による  $t$  検定 (5%水準) にて両群間の平均に差があるかどうかを分析する。なお、分析には Microsoft®Excel® for Microsoft365 MSO (バージョン 2408) の分析ツールを用いた。

4. 分析結果

まず、両群間の分散に違いがあるかどうかの  $F$  検定では、(図表 4-1) のような結果になった。

図表 4-1 A 大学と B 大学における期末テスト結果の  $F$  検定

$F$ -検定: 2 標本を使った分散の検定		
	変数 1	変数 2
平均	77.21	58.72
分散	312.51	311.46
観測数	48	76
自由度	47	75
観測された分散比	1.003	
$P(F \leq f)$ 片側	0.49	
$F$ 境界値 片側	1.53	



変数1にはA大学、変数2にはB大学のデータを入力している。平均点は大きく差がついているものの、分散はほぼ等しく  $F$  値が 1.003 となり、ほぼ 1 に近い値となった。 $P$  値（片側）は 0.4869 であり、これも基準の 0.05 を大きく超える結果となった。従って「両群の分散は等しい」という帰無仮説は棄却されず、 $t$  検定では「等分散を仮定した2標本による検定」を選択する。

図表 4-2 A大学とB大学における期末テスト結果の  $t$  検定  
( $t$  境界値 両側 5%)

$t$ -検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	77.21	58.72
分散	312.51	311.46
観測数	48	76
プールされた分散	311.86	
仮説平均との差異	0	
自由度	122	
$t$	5.68	
$P(T \leq t)$ 両側	<.0001	
$t$ 境界値 両側	1.98	

次に、両群間の平均に差があるかどうかを調べる  $t$  検定では、(図表 4-2) で示す結果となった。この  $t$  検定では、両群間における期末テストの平均に差があると言えるかどうかを検定している。帰無仮説は「両群の平均は等しい」、対立仮説は「両群の平均には差がある」とする。その結果、5%水準（両側）での  $P$  値は 0.0000000943 という非常に小さい値になった。基準の 0.05 を大きく下回り帰無仮説は棄却される。これにより、両群の平均は等しいとは言えない。

$t$  検定は母集団による平均値の差を検定しているが、A大学とB大学の2つの

集団としての平均値の差をみるためには効果量の計算が有効である<sup>8</sup>。これは、両群の平均値の差を標準偏差で除した値を求め、その値によって両群の平均値の差がどれだけ大きいかを判断するものである。今回のケースでは、標準偏差がA大学とB大学ともに17.5で等しいため、効果量  $d = (77.2 - 58.7) \div 17.5 = 1.057$  と計算される。Cohen (1988) によると、この値が0.2で「小」、0.5で「中」、0.8で「大」とされており、1.057という値は効果量が非常に大きいと言える(Cohen 1988)。従って、2コマ連続授業を実施しているA大学とそうではないB大学という2つの集団の、期末テストの点数における平均の差は非常に大きいと判断できる。

## 5. ディスカッション

(図表 3-1) で示す通り、2コマ連続で授業を行っているA大学では【講義①】+【講義②】として正味75分、つまり75分間で2コマ分の単元を終わらせている。本来なら1コマでも90分のうち大半を占めるはずの講義時間が、2コマで75分という短時間で済ませられる理由は次の3点である。

1. 1コマ目で十分なウォーミングアップができている
2. 【講義①】と【講義②】の間に、振り返りやおさらいが不要である
3. 前週までの学修内容についての定着度が高い

1点目は、1コマ目の授業にミニテストを行うことで集中力が高まることや、自分が間違えたところをその直後に行われる解説を聞くことで解決し、疑問を残さずに次へ進めることを指している。2点目は、2コマ分の学修内容をあらかじめ1つにまとめることによって、効率よく伝えることが可能になる。例えば、50m走を何秒で走れるのかを2回測定するには1本目と2本目の間にインターバルが必要になるが、100m走を1回計測するだけならインターバルは不要である。簿記の場合は、仮に1コマ目が「仕訳」、2コマ目が「転記」という単元であれば、これを「仕訳と転記」とすることで、あらかじめ総勘定元帳に転記することを前提として仕訳を説明していくことになる。3点目は、学生にとって前回までに学修した

内容の定着度が高ければ、講師側の説明に要する時間は自ずと短縮される。A大学の学生がどの程度の時間を自宅学修に充てていたのかを具体的に把握することはできていないが、目視する限りでは授業中に手を動かすことはできていたので、自力で問題を解けるまたは解こうとするレベルまでは達していたものと考えられる。その理由としては、2 コマ連続授業の場合は時間が十分にあるので学生が実際に手を動かすための時間をカリキュラムに組み込みやすい、逆に、手を動かすようにしないと一方的に講義を聞くだけでは集中力を保つことが難しいこと、自宅学修をしているとすればそれに必要なコンテンツ<sup>9</sup>を用意していたことなどが考えられる。

大学設置基準で明記されているように<sup>10</sup>、大学の授業科目は1単位あたり45時間が必要である。今回取り上げている初学者向けの簿記は両大学とも2単位であるから、最低でも合計90時間の学修時間を要することになる。そのうち22.5時間が講義時間で、残りの67.5時間は自宅学修時間であるからこれが各自で実行されていない、または不十分であるなら、単位取得に必要な到達レベルに届かないことは容易に想像できる。

予習については、予備知識がなくて学修可能なコンテンツ（動画や資料等）を用意することで学生はシラバス通りに予習を進めることができる。しかし、復習はその日の単元について学生が一定のレベルに達したか否かが重要になってくる。簿記の場合は体育と同様に、ルールの理解だけでなく実際に身体が動くことが求められるので、授業内でルールを理解し、体現し、再現できるのかということろまで確認してこそ有効な自宅学修が可能になる。つまり、少なくとも自力で練習問題を解けるレベルに達していなければ時間があるがなかろうが不十分な自宅学修しか期待できないということである。

また、A大学の授業について特筆すべき点は、1コマ目と2コマ目との間にある休憩時間を大半の学生がそのまま自席で学修し続けていたことである。1コマ目を早めに切り上げていることも理由の一つに挙げられるが、直前に解いたミニテストに関する質問が個別に多く寄せられていたことから考えると、学生は今、学修したことに対するフィードバックには非常に敏感で、ミニテストの結果は成績に反映しないと明言しているにもかかわらず、ゲーム感覚で「なぜ間違えたのか」「なぜできなかったのか」は大いに気になるようであった。

今回の分析では、いわゆるプレテスト（事前に両群の平均が等しいかどうかを見るためのテスト）を行っていないので、そもそも両群に差があったのではないかという疑念を完全に払拭することは困難である<sup>11</sup>。しかし、成績が良かったA大学のほうが実質的には授業回数が1コマ少ない（A大学は15コマ目の授業内に期末テストを行うことになっており、B大学は15コマの授業を終えてから翌週が期末テストになる）にもかかわらず、有意な差が認められた。また、今回はクラスサイズの違いによる影響は考慮されていない。成績が良かったA大学の受講者数がB大学よりも少なかったことが、成績面で有利に働いた可能性もある。両大学ともに座席指定はされておらず学生は自由に座席を選ぶことができたが、A大学では教室の収容定員が履修人数に合致していたことも学修効果を高める一つの要素であった可能性もある。クラスサイズと学修効果の関係については、今後の課題とする。

## 6. 今後の展望

社会人の初学者を対象とする日商簿記3級講座は、概ね20時間程度でカリキュラムが組まれている。それらのうち、筆者が講師として担当した最も短期集中型のものは7時間×3日間というカリキュラムであった。3日間というのは土曜日もしくは日曜日の3週連続であり、3日間連続ではない。これは、受講生が平日に自宅で復習をする前提で組まれたものと思われる。この講座はたとえ3日間であっても総授業時間数は21時間に達するので、一般的には日商簿記3級の範囲を網羅すべき時間数は充分だといえる。しかし、教育現場ではいかに7時間を集中させるかという点が難しく、管理者側の話では担当講師によって受講生の満足度にかかなりの開きがあったとのことである。筆者がこの講座の運営で心がけていたのは次の3点である。

1. 早い段階で受講者の緊張を解き、チーム全員でがんばるという雰囲気を作る
2. 理解が早い人や、社交的で明るい人を指名して、積極的に先生役を任せる
3. 休憩時間に受講者同士がおしゃべりしやすいように配慮する

大学の授業 15 コマは 22.5 時間に相当するので、最短で 7 時間×3 日間（のべ 21 時間）＋期末テストと解説（1 コマ 90 分）というカリキュラムも組めるかもしれない。これを初学者向けに開講するのか、商業高校で簿記を学んだ経験がある学生に限定した 1 年次配当にするのか、部活動などで欠席が多くなる学生向けに開講するのか、運用のしかたは工夫次第と思われる。短期集中であれば、外部講師に依頼することも検討し易くなるだろう。

一方で、各地の商工会議所等で開催される講座等は 2 時間×週 3 回が一般的である。このペースだと約 1 ヶ月かけて習得していくカリキュラムになるが、現場の感覚では短期集中よりもこちらのほうが挫折する者が出やすいように感じられた。受講生は職場の上司や同僚の理解のもと、定時で仕事を終えて急いで教室に駆け込まなければならず、しかも、自宅で過ごす時間の多くを予習復習に充てるために家族の協力が不可欠になる。そのような生活が 1 ヶ月も続けられるのかという点に困難さの理由が存在する。

受講期間が長くなると日常生活の中に学修を組み込むという作業が必要になるが、短期集中であればイベントに参加する感覚に近いのかもしれない。このことを大学の授業に当てはめると、従来の週 1 回×15 週もしくは 30 週に必要な予習復習は学生にとっては日常生活に組み込む、つまり、習慣にしなければならない。短期集中のカリキュラムであればそれをイベントとして捉えるので、学生に予習復習の習慣化を強制する必要性はないのかもしれない。興味がないことを習慣にすることはハードルが高いが、イベントであれば特に興味のないことであっても、「友達といっしょなら」「何か良いことがあるなら」などと自分の中で理由をつけることで、参加へのハードルは相対的に下がる。最終的にイベントに参加すること自体が習慣になれば、これも学修効果を高めるための有効な方法に成り得る可能性がある。

## 7. おわりに

結論として、初学者対象の簿記では週 1 コマで授業を実施するよりも 2 コマ連続授業にしたほうが学修効果は高まることが明らかになった。この結果をすべての科目に当てはめることはできないが、少なくとも身体を動かすことや何らかの

作業を伴う授業科目では有効である。

学生の自宅学修時間については、それが減少する最大の理由として「何をしてもいいかわからない」が挙げられる。大学生の基礎学力不足や過剰なアルバイトなど様々な問題が指摘されているが<sup>12</sup>、シンプルに「わからないことはできない」に尽きるのではないか。スポーツでもルールを理解することはもちろん、最低限必要な動きをマスターしないとプレイを楽しむことができない。スポーツ施設を増やすだけではスポーツ人口そのものは増えない。もともとスポーツを楽しんでいる人たちの、その楽しむ機会が増えるだけである。学生の自宅学修時間もしくは授業外学修時間を増やすためには、空き教室を開放することが有効な場合もあり、個別の補講が有効な場合もあるだろう。しかし、簿記のような実習系の科目では連続授業にすることで、学生に過度な期待をすることなく学生を自力で問題が解けるレベルに引き上げ、その結果として学生の自宅学修時間を増やすことに寄与するものと考えられる。

【謝辞】 本稿の執筆にあたり、北居明先生（甲南大学）から大変貴重なコメントを頂戴しました。ここに記して感謝申し上げます。

---

<sup>1</sup> 文部科学省『教学マネジメント指針』中央教育審議会大学分科会（令和2年1月22日）に以下の記述がある。「テクノロジーの急速かつ継続的な進化、グローバル化の一層の進展の中で、社会は個人間の相互依存を深めつつより複雑化・個別化している。今後到来する予測困難な時代にあって、学生たちは卒業後も含めて常に学び続けていかなければならない。学生自身が目標を明確に意識しつつ主体的に学修に取り組むこと、その成果を自ら適切に評価し、さらに必要な学びに踏み出していく自律的な学修者となることが求められている。」（p. 1）

<sup>2</sup> 同上「同時に履修する授業科目が過多であることにより、学生が授業内外の学修に集中できなければ、「卒業認定・学位授与の方針」に定められた学修目標を満たすことが困難となる。学生の時間は有限であることを前提に、学生の学修意欲を保ち、密度の濃い主体的な学修を可能とするとともに、その学びを狭く



偏らせたり、逆に散漫なものとしたりしないためには、必修科目を適切に設定するとともに、学生が同時に履修する授業科目数についても、大胆に絞り込みを進めていくことが求められる。そのため、資格・免許等の取得の関係で必要となる授業科目が法令等で規定されている場合等やむを得ない場合を除き、細分化された授業科目の統合や、学事暦の柔軟な運用による授業科目の週複数回実施に向けた検討に早急に着手していくことが求められる。」(p.18)

- <sup>3</sup> 例えば、ICU（国際基督教大学）では3学期制を採っており、1コマ70分の授業を週3回実施する科目や70分授業を週1回3コマ連続で行う科目などがある。2025年度からはこのカリキュラムを踏襲した上で1コマ75分授業へ移行し、すべての学期について現在より期間が短くなる(国際基督教大学HP)。
- <sup>4</sup> ここでは、学修効果とは「期末テストの点数が高いこと」としている。
- <sup>5</sup> 日本商工会議所の簿記 商工会議所の検定試験 ([kentei.ne.jp](http://kentei.ne.jp))では、簿記について以下のように紹介している。「簿記は、企業規模の大小や業種、業態を問わずに、日々の経営活動を記録・計算・整理して、経営成績と財政状態を明らかにする技能です。」(日本商工会議所HP)
- <sup>6</sup> 全国経理教育協会主催「簿記能力検定」のこと。最も初学者向けのレベルは「4級」として2016年度まで実施されていたが、2017年度からは「初級」に変更されている。2024年度からは「初級」が廃止され、現在は初級レベルの「3級」から最も難易度が高い「上級」までの実施になっている。
- <sup>7</sup> 一般に、歪度の絶対値が0.5を超えず、尖度が2.5～3.5の範囲内であるならば正規分布とみなしても良いとされている。
- <sup>8</sup> 有意差検定などにおいてはサンプルサイズ(n)が大きくなるほど有意差が検出される可能性が高くなるが、効果量は標準偏差を用いることで標準化しているのでサンプルサイズの影響を受けずに効果の大きさを評価することができる。
- <sup>9</sup> 自宅学修用のコンテンツとしては、テキスト・ワークブック・電卓練習帳のそれぞれに單元ごとの音声ファイル(10～15分程度)を用意していることと、毎回の授業で実施するミニテスト(紙媒体)は余分に印刷しておき、学生が持ち帰って再度解くことができるようにしている。
- <sup>10</sup> 大学設置基準 第21条第2項
- <sup>11</sup> しかしながら、大学偏差値一覧(ランキング形式) 2025年度最新版 みんなの大学情報 ([minkou.jp](http://minkou.jp))によると、A大学の学生が所属する学科の偏差値は37.5 B大学の学生が所属する学科の偏差値は50.0(みんなの大学情報HP)であり、一般的にはB大学の平均点の方が高くなると予測しても差し支えなからう。
- <sup>12</sup> 大学生の基礎学力不足については、岡部他(1999)『分数ができない大学生』、同(2000)『小数ができない大学生』などで指摘されており、小野(2021)はこれらについて「基礎知識がないというより解法を忘れている学生が多い」と推定している。過剰なアルバイトについては、厚生労働省が2015年に行った「大学生等に対するアルバイトに関する意識等調査」がある。この調査で得た回答

に「試験の準備期間や試験期間に休ませてもらえない」「試験期間にシフトを入れられた、シフトを変更してもらえなかった」「シフトを多く入れられたり、他の人の代わりに入れられたり変更してもらえなかったなどのために授業に出られなかった」などの意見がある。

## 参考文献

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄（1999）『分数ができない大学生 21 世紀の日本が危ない』東洋経済新報社

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄（2000）『小数ができない大学生 国公立大学も学力崩壊』東洋経済新報社

小野正人（2021）「大学生は基礎知識をどこまで理解しているか ―授業における数学・社会テストからみた一考察―」『城西大学経営紀要』巻 17, pp. 159-170。

公益社団法人 全国経理教育協会 ZENKEI <https://www.zenkei.or.jp/>（最終閲覧日：2024 年 9 月 14 日）

厚生労働省「大学生等に対するアルバイトに関する意識等調査」資料編、「大学生等へのアルバイトに関する意識等調査結果概要」別紙 1 労働基準局労働条件政策課（2015）

国際基督教大学 <https://www.icu.ac.jp/>（最終閲覧日：2024 年 9 月 14 日）

庄司 豊・井上秀一・掛谷純子（2020）「簿記教育における習熟度別クラス編成の教育効果」『京都女子大学現代社会研究』第 22 号, pp. 29-38。

大学 偏差値一覧（ランキング形式） 2025 年度最新版 | みんなの大学情報（minkou.jp）<https://www.minkou.jp/university/ranking/deviation/>（最終閲覧日：2024 年 9 月 14 日）

田邊 正・水代 仁（2019）「簿記教育における導入期の現状分析 ―学生のモチベーションと学修効果に与える影響について―」『松山東雲短期大学研究論集』第 50 巻, pp. 68-81。



手嶋竜二・金川一夫（2019）「簿記の授業における集中力維持に関する研究 ―「電卓演習」導入の効果測定について―」『九州産業大学商経論叢』第59巻 第4号, pp. 43-59。

原田敏秀（2021）「高等学校における連続した体育の授業の考察」『山梨大学教職大学院 令和3年度 教育実践研究報告書』<https://www.edu.yamanashi.ac.jp/>  
（最終閲覧日：2024年9月14日）

原田敏秀（2022）「連続した体育授業の可能性 ―豊かなスポーツライフの実現に向けて―」『山梨大学教職大学院 令和4年度 教育実践研究報告書』  
<https://www.edu.yamanashi.ac.jp/>（最終閲覧日：2024年9月14日）

日本商工会議所「商工会議所の検定試験」[www.kentei.ne.jp/bookkeeping/about](http://www.kentei.ne.jp/bookkeeping/about)（最終閲覧日：2024年9月14日）

文部科学省「柔軟なアカデミック・カレンダーの設定について」中央教育審議会  
大学分科会 大学教育部会（第23回）資料2（2012）

文部科学省「教学マネジメント指針」中央教育審議会大学分科会（2020）

文部科学省「教学マネジメント指針（追補）」中央教育審議会大学分科会  
（2023）

Cohen, J. (1988) *Statistical power analysis for the behavioral science (2nd ed.)*, Hillsdale, NJ: Lawrence Earlbaum Associates.